

リレーコラム ～20周年ピクニック～

森会 20 周年を迎えた昨年度は、新旧会員参加懇親会の開催、のぼり・腕章の新調など 20 周年事業が盛んに営まれました。

年度も押し詰まった春の 1 日、20 年前、森を育てる会を油山自然観察の森の通年行事として始めた初代担当レンジャー中村聡さん((公財)日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリ勤務)(以下中村 R) 来福の日にあわせ、旧会員の声掛けで、森のピクニック(新旧会員懇親)が行われました。世話役が参加できなかったため、現在の会活動の説明は主に小川レンジャーがしてくださいました。【報告/柴戸 撮影/森】

とき 2016 年 3 月 29 日(火) 12 時～15 時

- 内容
- ・写真で初期の森と活動を振り返る
 - ・アカマツ林・カブ森の散策
 - ・参加者：現会員他 4 名、旧会員他 6 名

1. 初期の活動を振り返る

ー 森会関連年表 1992 年～2000 年 ー

1992～95 年「カブトムシの森整備事業」(福岡市)

1995 年 自然観察の森行事「カブトムシの森を育てる会」始動

1996 年行事名「森を育てる会」に名称変更

1997 年 6 月アカマツ林管理について 重松敏則先生講師で視察・話し合い。9 月アカマツ林プロジェクト開始

■ 初期からの活発な活動を支えたもの

会員「行事としての会が始まった翌年から、アカマツ林の保全にも着手し、会員が世話役となつての活動に移行するなど、展開が速かったのに驚く。」

中村 R「自分は最初のきっかけをつくったが、会員が力をあわせ、コーディネートする歴代のレンジャー方が頑張ってきたため 20 周年があると思う。」

会員「うん・えー会という場を設定したことがよかった。やりたいことができたとき、2 か月に一度のうん・えー会で話し合え、活動がうまくいった。」

2. お昼休憩



芝生広場で満開の桜を愛でつつ、石橋さんご持参のブルーシートに座り、20 周年を寿ぐシフォンケーキや皆の心づくしのお昼・お土産を頂きました。

3. アカマツ林の散策



■ マツタケが出ることも夢見つつのアカマツ林

小川 R「森会はアカマツの単林として管理している。夢はマツタケの出る山ということで、ソヨゴなどマツタケと相性の良い木や、虫が訪れるクサギなど、世話役さんと相談しながら残していく木もある。」

会員「伊那の藤原さんというマツタケ生産者さんのアカマツ林に行ったが、下層にも植物があり、乾燥しないようにしている。林齢 30～60 年がマツタケの最盛期とのこと。詳しくは『マツタケ山づくりのすべて』全林協刊(会蔵)を。」

■ 市民の森のアカマツ林

会員「県木の森のアカマツが枯れている。森会管理地以外のアカマツ林もなんとかならないものか。」

中村R「CSRの、申し出があった時、どのようなメニューが提示できるか、受ける側の事情による」

4. カブトムシの森散策



■ カブトムシの森として、里山として

中村R「最初に杉檜が伐られて、細いクヌギが植えられたときはさびしかったです、育ちましたね。カブトムシはどうですか？里山管理のサイクルはどうなっています？」



＜92年3月 造成中 撮影：油山自然観察の森＞

小川R「カブトムシは出現しています。伐った後の材利用の大きな流れはまだなくて、キャンプ場の薪にしたりなど。」

■ 目標、調査

小川R「A地区は大木のクヌギを育て、C地区は萌芽更新。少し樹種を多様にしよう、林床の導入は世話役さんと検討中です。」

会員「初期から調査が活動に設定されていて、胸高

直径を計測するクヌギ成長調査が継続している。世話役が交代するときデータを引き継いでいる。木の変化がよくわかる。」会員「樹高を知りたかったね」小川R「子供広場に近いクヌギを測ったら 18mくらい。林床は、須田先生の勉強会(会報 112 号掲載)では、貧栄養の場所をつくっていくと落葉樹らしい種が出るかも、という話があった。」

会員「現在、林床の調査は、種名がわかりやすい花・果実・つぼみをつけているものを調べることにした。初期より植物が好きな人は減少傾向。会員のできることを活動することになる。」

■ 油山で活動することの魅力

中村R「油山で活動する魅力ってなんだろう？」会員「市内から近い、駐車場、お手洗い、ボランティアルーム等便利な施設が活動地の傍にある、自然観察の森という窓口があり、会だけではできないことができる。レンジャーのサポートが受けられる。作業のリスクは少ない。初心者への導入の場として適している」

■ 緑地保全を行う市民の育成

小川R「保全作業の計画・実施は会に中心になってもらっている。センターは森会という森と人をつなぐ場所に、市民がはいって来易くすることに力をいれている。高校生物部の参加などある。」

会員「森林保全を行うには新会員が次々入会しないと続けられないと当初から思っている。」

中村R「多くの研究者に施設や会が科学的知見の応援をもらっているのは特徴だと思う。きっと会員の会への思いは様々な方向・志向があるのだろう。それぞれの思いをどう活動の中で共有して活かしていくか大切と思う。」

20周年行事とのおかげで懐かしい方々に会い、森を歩き、森のこれまでとこれからを考える機会にも恵まれました。その中で、森を育てる会には、市民の森林への導入の場としての社会的責任がある、と改めて、誇りとともに感じました。

次号のリレーエッセイは、若者を森に導いてくださっている新地先生にお願いします。